

ジンバブエ・コミュニティ劇団

初日本公演について

楠瀬佳子

この度、2000年10月2日から12日まで国際交流基金の助成を得て、アフリカ文学研究会（本部大阪外国語大学、代表宮本正興）の招きで、ジンバブエ・コミュニティ劇団連合（ZACT）の代表であり、ケニア人の劇作家・演出家グギ・ワ・ミリエが率いるZaide Company（Zimbabwe African and International Dance Ensemble：ジンバブエ・アフリカ国際ダンス集団、1997年設立）の14名が初来日した。さらにZACTの研究者として知られるデール・バイアムと、ケニアの作家グギ・ワ・ジオンゴがアメリカから合流した。アフリカから演劇の一座が来日するのはめずらしく、多くの関心をひき、各地での公演は大盛況であった。ジンバブエ社会が直面している諸問題を、民族ダンスや歌を多分に取り入れた演劇という手段をとおして紹介し、言葉の壁を超えて共感と感動を与えた。

ジンバブエにおける 民衆演劇の発展とZACT

ジンバブエといえば、旧イギリス領南ローデシア。南アフリカのアパルトヘイトと同様の厳しい

人種差別政策が敷かれていたが、激しい解放戦争を経て1980年に独立した。アフリカ探検王リビングストンが「発見」したビクトリア滝、古い部分が11世紀まで遡る巨大な石造建築遺跡グレート・ジンバブエ（土地の言葉で、石の家の意）で有名な国だ。ジンバブエは、11～19世紀に盛えたモノモタパと呼ばれるアフリカ人の連合王国の中心でもあった。ショナ民族が人口の70%を占め、他にンデベレ民族が住んでいる。植民地時代は白人入植が盛んに行われ、肥沃な土地の90%を白人が占拠したために、アフリカ人の多くは白人農場の低賃金労働者として働いてきた。独立後も土地をめぐる問題は解決せず、白人とアフリカ人の間で頻繁に衝突が起こっている。2000年6月に総選挙があり、与党と野党が5議席の差で拮抗した。

そのジンバブエでは、1986年に劇団の全国組織である前述のZACTが誕生した。これは全国に草の根的に活動していた200ほどのプロ・アマの劇団の連合体である。アフリカ、アジア、ラテンアメリカなど、これまで「第三世界」と呼ばれてきた各国で、演劇が民衆の教育、コミュニティの組織づくり、開発のための有効な道具として注目さ

れはじめたのは60年代からだった。ブラジルの教育学者パウロ・フレイレやペルーの演劇人アウグスト・ボアールらの名前が、民衆演劇のブームとともに、世界に知れ渡った。

演劇といえば、植民地期から、都市に住む白人の独占的な娯楽だった。ジンバブエでも独立以前から全国演劇機構が活動していたが、これは都市部の白人劇団を組織したもので、当時の国是であった文化の人種別分離発展政策の下で、常にヨーロッパの遺産・伝統が強調された。本国から審査員が招かれ、植民地白人の演劇がイギリスの伝統から逸脱しないように、細心の注意がはらわれた。

しかし、独立後、大学の演劇サークルは巡回移動劇場と称して国内各地で公演し、それまで都市中心だった演劇文化を全土に広めた。巡回移動劇場のほか、地元住民参加型のコミュニティ劇場もある。民衆演劇の神髄として、プロの作家や役者を抱える必要はなく、ごく普通の農民や労働者が台本づくりや芝居に参加するのである。対話、マイム、踊り、歌、朗読、人形芝居などマルチメディア的な手法が色彩豊かに統合されて、観客の意識に訴えるのである。出演者と観客の境界はなく、歌や踊りは観客との掛け合いですすめられるために、誰もがパフォーマンスの担い手となる。

民衆演劇では、物価高、水不足、保健衛生、アルコール中毒、収賄、夫婦喧嘩、新聞記事をヒントにしたものなど日常の風景が取り上げられる。一見単純だが、民衆演劇の根本には、演劇が社会と結びつくこと、演劇の社会的な役割に対する信頼がある。民衆演劇はそれだけ深く思想運動や社会運動とかかわっている。民衆演劇のキーワードは、開発と解放だといわれるのはこのためである。

さらには、アフリカ演劇には娯楽的要素と教育的側面があり、文化伝統の継承という重要な役割も担っている。人びとが困難な状況を生き抜いて

これたのは、民衆の叡智を集め、ともに自らの文化を作り上げてきたからだとの確固たる集団意識をバネにして、社会を変革してきた。

1980年に独立したジンバブエは、新しい国家建設のためには、政治的、経済的改革は急務であるが、同時に「精神の非植民地化」も緊急の課題だと考え、教育と出版と文化運動に力をいれた。そうした気運のなかで、ジンバブエ・コミュニティ演劇運動が教育文化省の支援を受けて誕生した。ZACTのリーダーであるグギ・ワ・ミリエは、元ナイロビ大学の開発研究所員、識字教育の専門家であり、ケニアのカミリズ教育文化コミュニティ・センターで作家のグギ・ワ・ジオンゴとともに行った民衆演劇運動の経験が高く評価され、1982年、独立後間もないジンバブエ政府から招聘され、ジンバブエのアフリカ演劇の指導にあたってきたのである。ジンバブエ解放闘争時の人びとの経験、コミュニティ独自のパフォーマンスを取り入れて各地を巡回し、大成功を収めた。この成功によって、コミュニティをベースにした草の根からの演劇運動が各地にわき起こったのである。

1983年、ジンバブエで開催された開発のための全アフリカ・ワークショップ（22カ国が参加）でこの試みに大きな支持が集まり、以後、開発と演劇を結びつけて、コミュニティ独自の課題解決型の演劇運動がますます注目されることになった。地区、州レベルで演劇ワークショップが開催され、民衆演劇、開発のための演劇の方法が模索されるようになり、全国に演劇グループの結成を促した。1986年、約200の草の根的な演劇グループが集まって、ZACTが結成された。同年、ZACTの主催で「ソリダリティー演劇祭」が催され、非同盟、反帝国主義をかかげ、南アフリカやナミビアの民族解放闘争への連帯を唱えた。ZACTの誕生の結果、保険衛生、識字教育、共同作業、環境破壊、エイ

ズ追放などをテーマにしたキャンペーン劇が増え、学校卒業生、中途退学者を中心としたフルタイムの演劇グループが生まれ始めた。

来日公演の様相

今回の来日初公演では、グギ・ワ・ミリエ作「労働者のメリーゴーランド」とダンス劇「雨乞いの踊り」が舞台にあげられた。

「労働者のメリーゴーランド」のあらすじを簡単に紹介しておこう。

〔第一場〕 ムーブメント1では、建設会社。労働者が登場。仕事に従事している様子を暗示するダンス（道路や橋をダイナマイトで破壊している）。ダンスが終わると、生活難を訴え、シヨナ語の歌が響きわたる。貧困、失業、物価高などを訴え、政府や経営者への不満の声がつづく。政治談義をやめよとの経営者の声がある。

ムーブメント2では、仕事に戻る労働者がマイムで表現される。観客に背を向けて静止。舞台と観客席を使って、労働組合、政府、経営者の三者会談がはじまる。政府、経営者は利害を共有している。最低賃金法、労働条件の改善など、これまでの空手形が繰り返される。政府は、土地問題解決（独立後も白人が土地を手放さない）の難しさを強調。労働組合と経営者の意見が対立する。政府は、世界銀行やIMFのせいだと矛先を転換し、ストライキの阻止に努める。経営者は組合を買収しようとする。

ムーブメント3では、労働組合、政府、経営者の三者は退場。生産に従事する労働者（マイム、歌、ダンス）。生活難を訴えている。経営者側のマネージャーが登場、操業停止を示唆。政府による土地や企業の国有化計画を非難、自らの失業を恐れ、荷物をまとめて退場。労働者の抗議の声が聞

こえてくる。

〔第二場〕 ムーブメント1では、労働者のデモ。三者会談の失敗を非難。世銀やIMFを非難し、「土地を返せ」と叫ぶ。警察の出動と催涙ガスに労働者は右往左往する。ラジオニュースで、アフリカ各地での労働運動が報じられる。

〔第三場〕では、少年と両親登場。ストライキを扇動したとして、父親は失職。賃上げ闘争と物価高の悪循環が繰り返され、一家は町を離れ、故郷に向かう。

この劇は、物価は上がれど、給料は上がらないサラリーマンの苦い生活に取材した社会劇であり、ジンバブエやアフリカの多くの国の現状を反映したものである。音楽、歌、踊りとダイアログで構成され、アフリカの労働者の状況を描く。不景気つづきで、労働者は不十分な報酬しかえられず苦しい生活を強いられる。企業に対し、賃上げ要求をすると、生産コストがあがる。その結果、消費者は物価の高騰に苦しむ。この悪環境が果てしなくつづくというのである。

「雨乞いの踊り」は、同じくグギ・ワ・ミリエ作・演出により歌とダンスで表現される。諸々の社会悪が原因となって旱魃が見舞ったとの想定で雨乞い師が世直しの策を講じるというものである。先祖の人びとは、旱魃の時太古の昔から雨乞いの踊りで、神に訴えた。日常生活での水の大切さを訴えるダンスドラマ。マイム、リズム、表情、身ぶりなどで喜び、怒り、憎しみ、愛などを豊かに表現。アフリカの儀礼の世界。

〔第一幕〕 第一場では、種々の伝統楽器が使われる。日照り続き。「鋤を取って、耕そう」の歌とダンス。農作業の様子がマイムで示される。植え付け、種蒔きの風景が表現される。

第二場では、ンデベレ語の歌で、旱魃と空腹が表現される。女性たちが登場し、水不足を訴え、

水を求めて放浪する。やがて、別の女が歌で旱魃の原因を告げている場面に出会う。泉が見つかる。やがて子供たちが遊びながら登場し、ついで父親が登場する。家畜の世話を忘れた子供たちのことをこぼす。野獣の声がし、子供たちがあわてて退場。夫婦が登場。訪問者が空腹と食料不足を訴える。次の訪問者も空腹のダンスを踊る。

〔第二幕〕 第一場では、「闘いはまだ終わっていない」の歌が聞こえる。雨乞い師登場。指導者の腐敗、近親姦その他の罪が祖先の怒りの原因だという。〔第三幕〕では、女性たち、長老、雨乞い師が登場。供犠が行われ、踊りと祈りが繰り返されるなか、雷鳴と雨の音が聞こえる。

この劇はアフリカ各地で行われている雨乞いの儀式的背景にある旱魃と飢餓の問題について考えさせる。アフリカの人びとは過酷な自然状況に翻弄されるままに生きてきたのではない。伝統的儀礼による浄化を通して、現代社会のリアルな問題が浮上する。そこにはアフリカの伝統的な叡智、価値観に対する全幅の信頼がみられる。

ジンバブエでは、現在水不足があり、電力供給にも制限が敷かれている。この伝統劇を通して現代にも通じる問題が指摘されて、その解決の道が示唆されている。2000年3月にオランダで開催された世界水問題会議でこの劇が演じられたのも、そのような問題を提示しているからである。

これらの出し物のほかに、トリニダード出身のデール・バイアムが一人芝居「祖国へ帰れ」を演じた。デール・バイアムは開発と演劇の専門家であり、ZACTについて研究し、グギ・ワ・ジオングの指導のもとにニューヨーク大学から博士号を取得している。また、トリニダードの伝統文化にも造詣が深く、自らも舞台演劇指導をしている。今回演じられた一人芝居は、カリブ海諸国からア

メリカに出稼ぎにやってきた人びとが入国拒否にあたり、人種差別を受けたりして、孤独で苦難の人生を歩む状況を、スライドや音響を駆使して歴史的に描くドキュメンタリー・タッチのものであった。

なお、ZACTの公演にあわせて、10月7日には京都精華大学で国際シンポジウム「文化と開発——アフリカの21世紀——」がアフリカ文学研究会と日本アフリカ学会関西支部との共催で開催された。アフリカ屈指の作家グギ・ワ・ジオングは基調報告で、アフリカ民族諸言語の発展を核心において文化的未来を構想した。ほかに五つのパネルがあり、言語問題、都市化、宗教、文学など広範なテーマについて議論された。文化・開発・グローバルゼーションといったキーワードをめぐって、現代アフリカの文化一般をめぐるシンポジウムとなった。

現代のアフリカは飢餓と貧困、民族・地域紛争が絶えず、戦乱状態の国々も多く、著しく国家の機能が低下しているのが目立つ。冷戦構造の崩壊や、IT革命が推進するグローバル化の一方で、アフリカ地域はますます周縁化されつつある。こうしたアフリカの現状のもとで言語や文化一般を対象としてアフリカを学び、研究教育することの意義が再確認された。

ZACTおよびデール・バイアムの公演日程はつぎのとおりだった。2000年10月4日京都精華大学AVセンター（無料）。10月5日立命館大学アートセンター（無料）。10月6日京都精華大学アートホール（無料）。10月9日大阪府吹田市の国立民族学博物館（入館料のみ）。10月10日東京の三浦人劇場（有料）。どこの会場も超満員だった。

（くすのせ・けいこ／京都精華大学教授
アフリカ文学研究会会員）